

被曝農業時代を生きぬく

第25回

原木きのこの生産を支えてきた福島の里山②

ふくしま中央森林組合 参事

吉田昭一

前回紹介したように、ふくしま中央森林組合はきのこの用の原木となるクヌギやナラなどの広葉樹を、植えてからおおよそ20年で伐採してきた。

切った後にはその根元から萌芽させ、それを再び育てて原木として出荷する。この繰り返しの中で、福島県田村市都路町の里山を経済合理性に沿ったかたちで守ってきた。だが、東日本大震災に伴う東京電力の原発事故の影響で木は切られないままに留まっている。これから里山をどう経営していくのか、参事の吉田昭一(57)に聞いた。

(取材・まとめ／窪田新之助)

450 haの伐採急務

農水省は原木の出荷基準を1kg当たり50ペクレルに定めている。これに沿って、ふくしま中央森林組合は出荷を自粛している。

「都路町ではいままさぐ伐採しなくてはいけない広葉樹林は450 haを越

えているっていうのに、手が出せないからまいっちゃうよ。30年を越えれば、切っても萌芽しにくくなってくるんだ。年月が経つほどに、植えるおさないとならない木が増えてくる。それは非常に手間がかかることだよ」

同組合は毎年130 ha(原発前3カ年の平均値)で木を植え、770 haで下草を刈り、60 haで除伐し、70 haで不良萌芽の除去をしてきた。これらの仕事はいまどうなっているのだろうか。

「いまは基本的に保育をしているだけ。保育っていうのは広葉樹を植えた後に5年生から7年生になるまで、毎年連続して下草刈りをするわけさ。雑草に負けないようにね。萌芽は伐採後3年から5年したら優劣がでてくる。そこで優れた萌芽以外はすべて取り除く。この作業もずっと続くわけではない。いまは原木として出荷できないから基本的に採採

することはできず、新しい木を植えていないわけだから」

「原発事故の前に植えた木の辺りの下草刈りの仕事だつて毎年少なくなっていく。減った仕事分の営業補償は東電からもらっている。それに集落内の除染の仕事もある。ただ、これは一過性だからね、永遠に続くわけではないのさ。だから植栽して20年で伐採する循環を取り戻さなければならぬんだ。それもすぐに。一気に切るとなったら、保水能力が失われるなど山が荒れてしまう。そういう事態は避けなきゃならないですよ」

期待はバイオマス発電の原料

里山を経済的に運用していくサイクルを取り戻すため、同森林組合が広葉樹の用途として検討しているのが、原木ではなくバイオマス発電の燃料だ。

「あちこちから、ここの里山がどうなっているか視察に来るんだ。全国に原木を出荷してきたのにストップしているから、いつ再スタートするか知りたいんだね。でも残念ながら当面は原木として出荷できないのを目に見えている。除染には長い時間がかかるから。だからといって、放っておいていいわけではない。20年ほどで切ってきたというサイクルを止めてしまえば、いずれ職員に給料を払えなくなるし、里山は荒れていくわけさ」

「いまは原木では売れないので、代わりにパルプやチップ材で出荷するという選択があると思った。これは国の規制値が低いので、それを満たすだけの素材が出せる。ただ、現在の需給バランスでは伐採しただけの出荷量を確保できない。そこでバイオマス燃料とすることができないか。ただね、地域の住民から反対意見が出て止まったままになっている



切り出した木々を運ぶために整備された林道



都路の里山



表層の土を詰めた土嚢

都路事業所の森林整備面積(ha)の年次別推移

	2008	2009	2010	2011	2012
植栽	81	207	104	42	36
下刈り	791	681	846	503	305
除伐	38	36	100	4	0
萌芽除去	122	39	55	95	20

※ふくしま中央森林組合の資料から作成

んだ。発電自体はその地域ごとにやらなきゃならない。ほかでやるのならどうしたって木材の輸送なんかでコストがかかる。ただし出てきた廃棄物は多少遠くても最終処分場に運ぶようにすれば、住民の了解も得られるんじゃないかって思っている。いま5年間の事業計画を作っている途中で、来年度から動き出したと考えている。もちろんいつかは原木の里山に戻したい」

組合の都路事業所。吉田が旧都路村森林組合に入組した頃、燃料革命が起き、木炭として使われなくなったナラやクヌギ。しかし、偶然ながらそれは原木としては実にいい大きさに育っていた。そのためシイタケ農家からの注文が入るようになり、今のような全国でも珍しい里山ができた。その事業に携わってきた彼のこれまでの仕事は、そのまま都路の原木生産の歴史と重なる。その胸にいま何が浮かぶのか。

「伐採が止まってしまう事態だけは避けたい。それからもう一つ、これから広葉樹ばかりの里山を変えようと考えている。コナラやクヌギ一色というのは欠点だよ、野生動物の保護や保水の機能という意味でいったらね。これまでは経済性ばかり追求してきたからそのことを実行することはなかったけど、今後は数種類の木々が育つ里山にしていきたい。それでどれだけ生態系や水質の保全に貢献できるかはわからんよ。でも、やってみる価値はあると思ってる」

里山は人間の営みを映す鏡のようなものだろう。燃料用として、次には原木用としてコナラやクヌギに覆われてきた福島県田村市都路町の山々。それはまさに人々が経済的な価値を追求してきた結果だった。吉田参事らはいま、そこに生態系を守るといって新しい価値を見出そうとしている。原発事故という多大な苦難に遭いながらも、彼らは自分たちに多大な恵みを与えてくれた里山との対話をこれからも続けていく。

(文中敬称略)